

アリ・ラジャブリー
歴史学博士・教授

アゼルバイジャンにおける 貨幣の歴史につき



アゼルバイジャンはアゼルバイジャン民族の古代歴史的な生国である。

アルバニア。アレクサンダー大王模倣貨幣、銀、テトラドラクマ

旧メディアのアトロパテネ王国のアケメネス朝総督の普通名詞とアトロパテネ王国の創立者であるアトロパトの名前に基づいて古代ギリシャの作家ポリビウス（204 - 210年紀元前）、ストラボン（54 - 37年紀元前）、プリニウス（23 - 79年）等に「アトロパテネ」と名で呼ばれた「アゼルバイジャン」という地名は初めて貨幣のモニュメントに会っている。3世紀紀元前3世紀から

始めてエクバタナという造幣局で鑄造された貨幣にアトロパテネ王国の文化・経済的な中心の一つであるアゼルバイジャンの名はギリシャ文字のモノグラムとして伝わる：A. T. P. 「Α τ ρ ο π α τ η ν η」。その後、サーサーン時代の貨幣と碑銘のモニュメントにパフラヴィー字体で A. T. と「Āturpātākān」と書かれ、そしてイスラム帝国のディルハム、サジー

ド・サラリード・アクコユンルーなどのアゼルバイジャンの中世封建国の時アラビア語のアルファベットに依じて □□□□□□□□（アゼルベージェン）と書かれ、国はもう1500ぐらいこの国名で知られている。アゼルバイジャンの歴史は物質的・精神的な文化に、貨幣のモニュメントを含めて大多数の考古学的・民族的な人為構造に固定している。アゼルバ

イジャンは豊かな貨幣遺産を持っている。古銭データの収集、保存、記録の共和センターであるアゼルバイジャン国立科学アカデミーのアゼルバイジャン国立歴史博物館にある貨幣基金において10万以上の貨幣が集中され、その中でほとんどは共和国内に発見され、アゼルバイジャンの国々の鑄造ものである。貨幣基金にまた征服者がアゼルバイジャンの都市に鑄造した貨幣及び近い海外と遠い海外のほぼすべての国の多かれ少なかれ相当な貨幣コレクションを持っている。

アゼルバイジャンは昔から自分の軍戦略・自然地理学的・貿易経済の地位及び豊富な天然資源で様々な民族と国々の注意目を引いた。そのことは順番にアゼルバイジャンが文明世界と接触する原因になったわけである。この交流の結果はアゼルバイジャンにおいて貨幣が登場したことである。それらは、広大なグレコマケドニア帝国にわたる主な回転手段として使われたアレキサンダー大王の銀製のテトラドラクマとドラクマだった。この銀貨のすぐ次第にアゼ



アルバニア。アレクサンダー大王模倣貨幣、銀、ドラクマ

ルバイジャンへセレウキアのヘレニズム国の硬貨が、帝国の崩壊後パルティア、バクトリアと小アジアの国（ビテュニア、カッパドキア、ポントス）の貨幣が浸透し始めた。過去一世紀にわたりアゼルバイジャンに10以上の古代貨幣の宝が発見された。

古代貨幣の流入のおかげでアゼルバイジャンは通貨の貨幣流通高に入った。こういうシステムはアゼルバイジャンの北部、今のアゼルバイジャン共和国である領土が20世紀初頭ロシア帝国に併合されるまで永久に二千年にも伸びた。

貨幣との知り合い、ヘレニズム文化界と多面の交際、または北アゼルバイジャン（アルバニア・水路）と南アゼルバイジャン（アトロパテネ・陸

路・グレートシルクロード）を通じて国際貿易と輸送ルートの交差点に位置している古代アゼルバイジャンの高い経済的潜在力はここで貨幣流通の質的に新しい発展段階につながった。紀元前3世紀から始めてアルバニアの首都カバラケ（今のガバラ）においてアレキサンダー大王の硬貨の模倣である独自の銀貨が鑄造される。知られている限りでは、これらの貨幣が偉大な征服者の死後長い間貿易硬貨として鑄造され、中央アジアからイギリス諸島にかけてヘレニズム外圍の全領土にわたって模倣硬貨のプロトタイプとなった。これらのいわゆる“野蛮模倣”は匿名で発行され、その流通は、ローカル性質を持っていた。ヘレニズム国セレウキアとパルティアの



アトロパテネ王国。ダリウス（60BC）、銀、ドラクマ

貨幣の流入に従ってこの貨幣の模倣も始まった。紀元前2世紀、アゼルバイジャンにパルティアの貨幣の流入が増え、その中でミトリダテス2世（紀元前124-88）の銀ドラクマ、そして、特に父親側から史的なアゼルバイジャンの南部アトロパテネの皇帝であるアトロパチー朝出身のアルタバナ3世（10-38年）の貨幣が広く行われた。「Α Ατροπατενα」のようなモノグラフを持っていたこの皇帝の貨幣はアルサケス朝の第2首都であったパルティア市とアトロパテネの主な都市エクバタン（今のハマダーン）に鑄造された。これらの鑄造は死後、後続のアルサケスの時代も続いて、およびアゼルバイジャンのみならずまた全体南と北コーカサスさえ

貨幣流通高の主要な成分であった。経済生活の沈滞や中世初期の時代に特有な貨物貨幣の交換の混乱はアゼルバイジャンの貨幣経済にも影響を与えてしまった。何世紀にわたって大幅に衰運に向いたコーカサス・アルバニアの模倣硬貨の発行は紀元前1世紀もう完成した。おそらくこのことにパルティアのもっと高い質のドラクマと「認可」のデジュールが役割を演じて、さらに、最後のアルサケス朝

の時起きた経済の段階的な衰退は現物交換の普及につながった。アゼルバイジャンの造幣の驚くべき集約的な発展はサーサーン朝の貨幣流通高を使って5世紀終わりから7世紀前半までのことである。そのことについて国の拡大な生産と手工業、文化と軍事政治的な中心、その他に同時に商品交換と貨幣流通の中心であるシーズ、アルデビール、ナクチェワーン、バルダ、バクーとデルベントで設立された主にアゼルバイジャンの貨幣局において鑄造されたサーサーン朝の銀ドラクマ（しばしばビザンチンとともに）の大多数の宝が証明している。アゼルバイジャンがイスラム帝国の中に入る時代は都市、商品生産と貿易の発展の特徴を持った。カリフディルハムの鑄造の初期地方はアランとア



アップバシード朝。ハルン・アル・ラシード、アラン、
170=786/7、ディナール、ゴール

ゼルバイジャンで、その貨幣が対応して89=707/8、105=723/4と知られている。新しい貨幣局が開かれた：アラン（バイラカン）、ジャンザ（ギャンジャ）、アル・ヤジディヤ（シャマフ）、バーフ・アル・バイザ、アルズ・アル・ハザール。

時期の最も本質的な政治・経済的な要素はアゼルバイジャンの様々な地方に「シッカ」という貨幣象徴と「フトバ」と呼ばれる金曜日の礼拝で支配者の名前の言及という王朝政の治封建国々が登場することとなった。

シルワン・シャー国のマジヤディード朝、サジード朝、サラリード朝の銀ディルハムはカリフのディルハムと同等に9-10世紀巨大なアフロ・アジア・ヨーロッパ市場を襲った国際商売に参加していた。

この貿易で東洋の輸入超過（硬貨の、すなわち銀ディルハムの膨大な量で輸出）はその銀の輸出原の衰弱および10世紀の終わりから西南アジアの金貿易にイスラムルネッサンスを生んだ経済現象の一つである悪名高き「銀の危機」の出現の原因



の一つとなった。内国商業、都会商業では銅が銀の代わりに来て、国際及び国内に都市間の商品貨幣交換に支配的な地位をお金独特の機能を持つ金が占めた。この時代における国際通貨として金の役割の強化はアゼルバイジャンの領土にあるカリフ、ブヴェイヒード朝、セルジュークの金ディナールおよび特にビザンチンのソリドゥスの宝により確証される。

長年にわたったアゼルバイジャンの社会経済・文化的な生活の前進運動を延期したモンゴル人の大虐殺にもかかわらず14世紀初頭から徐々に古代都市が回復されて、新しい都市が建てられた：アラギョーズ、バザール、バビ、バリック、ゲシタスビ、ガルガール、ガラ・アガージ、カラバーフ、マフムドアバード、ポールとアラーズ、フナンな

ど。ところで、この全部の都市はその貨幣製造のおかげでよく知られていた。国内と国際貿易関係が成立した。商品貨幣関係が活発になって、その流通手段に対する需要を復興したイルハン朝の銀ディルハムによってかなえた。2.13グラム重量のガザン・マフムードの統一ディルハムがアゼルバイジャンの40以上の都市の貨幣局で鑄造された。

アクサック・ティムール（ティムール）によって14世紀ごろ少なくなった中央アジアの「ミリ」とジャライル朝のディルハム（約1グラム）の代わりに実施された新しい貨幣単位である6.2グラムのテングはガラ・ゴユンル、アク・ゴユンルとシルワン・シャーのような15世紀のアゼルバイジャンの封建国々の貨幣システムの基礎となっても、16世



シルバン・シャー・マジヤジード朝、ヤジード1世
(799-801年)、184 = 800/1、ディルハム、銀

紀初頭イスマーイール1世 (1501-1524年) の重量貨物 (9.36グラム) で高品位、額面価格が50銅ディナールのシャヒーに変わった。イスマーイール1世の貨幣法は彼が創立した拡大な帝国であるアゼルバイジャンのサファヴィー王国の中に入った都市にある最も知られた60つの貨幣局の鑄造により証言されている。

16世紀にわたって民族的に近いチュルク諸語の国 (サファヴィー朝、オスマニード朝、シャイバーニー朝) の間に長く続く戦争はアゼルバイジャンの国家体制の以後の地位及び貨幣局の数がかなり縮小に非常に有害な影響を与えてしまった。これらの戦争中同世紀の終わりに半ミスカル (2.34グラム) に代われながらシャヒーの重量が不変に

衰えていて、さてムハンマド・フダベンデ (1578-1587年) によって実施された1ミスカルの重量 (4.68グラム) で「ムハメッディー」(マフムッディー) と呼ばれる通貨単位の代わりにアッバス1世 (1587-1628年) の治世に新しい通貨単位である「アッバシー」(7.68グラム) になった。あるいは、この通貨単位は18世紀後半アゼルバイジャンの領土において出現した封建制度のもとで領有された土地のハン国とその匿名の銀と自主的な銅の鑄造の時代も主要単位であった。間もなく北アゼルバイジャンのハン国がロシア帝国に併合されておおよび全帝国の貨幣流通高の範囲に入った北アゼルバイジャンは2世紀たって1919年アゼルバイジャンの最初の独

立共和国に還元された貨幣法を失ってしまったのである。しかしながら、国際通貨制度が貨幣制度から紙幣制度に移ったと関連して今後こそは紙の信用創造の状態に還元されたのである。✿

参考文献：

1. Пахомов Е. А. Монетные клады Азербайджана и других республик, краев и областей Кавказа. Вып. I - IX. Б., 1926-1965
パホモフ Е. А. 『アゼルバイジャンやコーカサスの他の共和国、州、地方における貴金属』の第一巻、1926-1965年
2. Пахомов Е. А. Чеканка в Албании подражаний монетам македонским или селевкидским / Материалы по истории Азербайджана. Труды МИА, Т. I, Баку, 1962, с. 74-76
パホモフ Е. А. 『アルバニアにおいてマケドニアカセレウコスの模倣貨幣の鑄造』、アゼルバイジャン国立歴史博物館の編集、バクー、1962年、74-76ページ。
3. Голенко К. В., Раджабли А. М. Али-Байрамлинский клад и некоторые вопросы обраще-

ния парфянских монет в Закавказье / Москва, ВДИ, №2, 1975, с. 72–93

ゴレンコ К. V、ラジャブリー A. M. 『アリ・バイラムリーの宝及びザガフカージェにてパルティアの貨幣流通高のある問題』、2号、モスクワ、1975年、72–93ページ

4. Бабаев И.А, Казиев С.М. Кабалинский клад монет эллинистической эпохи / Нумизматика и эпиграфика, IX, М., 1971

ババエフ I. A、カジエフ S. M. 『ヘレニズム時代のカバラ貨幣宝。古銭学と題銘学』、第9巻、1971年

5. Луконин В.Г., Раджабли А.М. Клад из Чухур-Кабала / Иран в III веке. Москва, Наука, 1979, с. 74–85

ルコニン V. G、ラジャブリー A. M. 『チュフル・カバラの宝。3世紀にてイラン』、モスクワ、ナウカ編、1979年、74–85ページ

6. Debevoise N. A. Political History of Parthia. Chicago, 1938

7. Wroth W. Catalogue of the Coins of Parthia. L., 1903

8. Раджабли А.М. Еще раз о «серебряном кризисе» в денеж-



ナヒチェヴァンハン国。不明。ナヒチェヴァンハン、1198=1783、銅

ном обращении Азербайджана и впервые об уникальных монетах феодальных правителей Азербайджана XII - нач. XIII вв. / Материалы научной сессии, посв. итогам научно-исс. работ музея за 1982 год. Баку, 1983

ラジャブリー A. M. 『もう一度アゼルバイジャンの貨幣流通高の「銀の危機」につき、また初めて12–13世紀初頭アゼルバイジャンの封建支配者のユニークな貨幣につき』、1982における科学的調査の結果記念科学会議の資料編、バクー、1983年

9. Савельев П.С. Мухаммеданская нумизматика в отношении к русской истории. СПб, 1842

サベレーフ P. S. 『ロシア史に対するムハンマドダンの古銭学』、Санкт-Петербург、1842年

10. Раджабли А. Нумизматика Азербайджана. Б., Элм ва хаят, 1997, с. 107

ラジャブリー A. M. 『アゼルバイジャンの古銭学』、エルム・ワ・ハヤット編、バクー、1997年、107ページ

11. Буниатов З., Раджабли А. Взаимоотношения Сельджукидов Малой Азии и Закавказья по нумизматическим данным / Известия АН Азербайджана. Серия истории ... Баку, 1974, № 2

ブニヤトフ Z、ラジャブリー A. M. 『古銭学データによる小アジアとザガフカージェのセルジューク朝の相互関係』、アゼルバイジャンの科学アカデミー紀要編、2号、バクー、1974年